

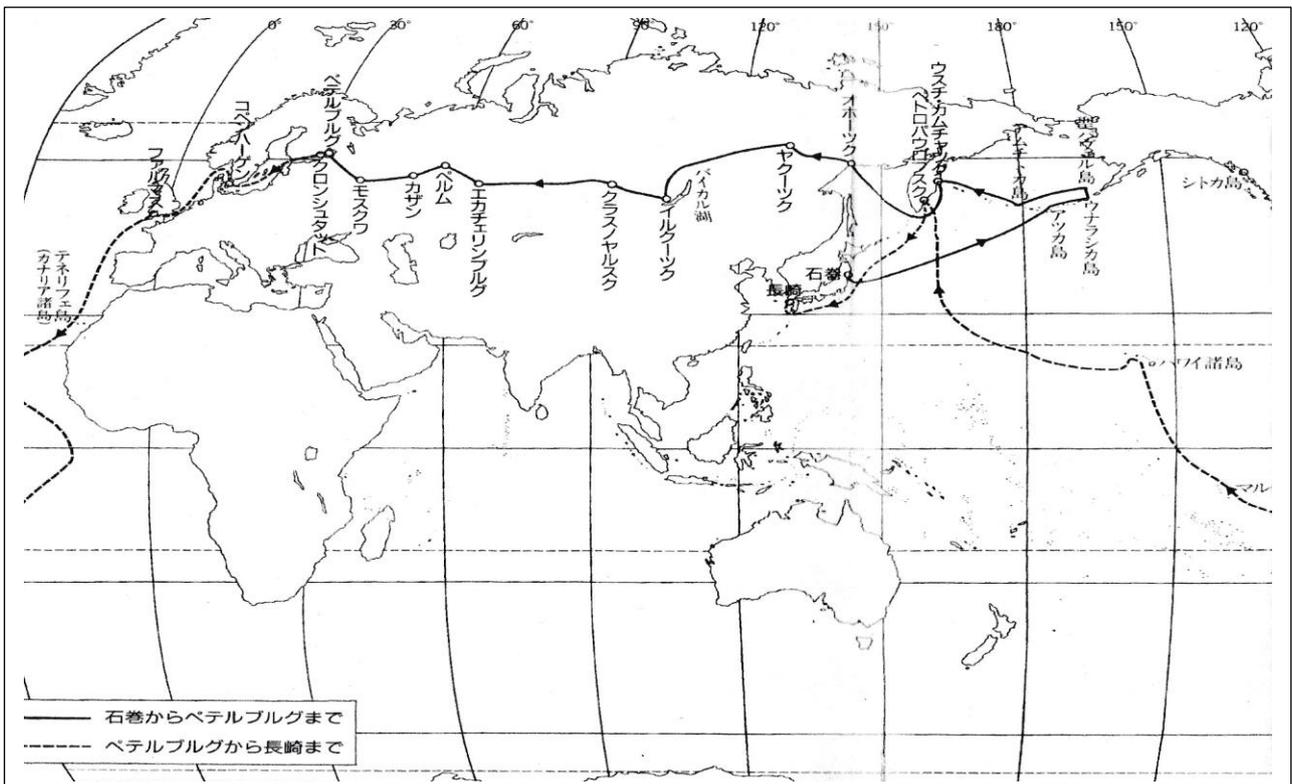
初めて世界一周した日本人は仙台藩の漂流民 4 名であった。

八柳 修之

日本人で初めて世界一周した人はだれか。支倉常長？ 支倉常長はメキシコに渡り、スペイン、イタリアに行ったが一周はしていない。「初めて世界一周した日本人」を検索すると、一発で同名の本がヒットした。加藤九ぞう（示すへんに作る）「初めて世界一周した日本人」（新潮選書）と吉村昭の「漂流記の魅力」（新潮社）である。

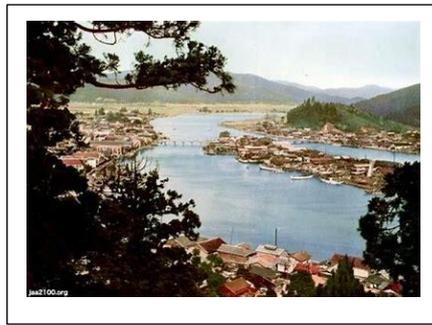
今から 230 年前もの 1793 年、仙台藩の船乗り 4 人が遭難しロシアに渡った後、ロシアで生活し、11 年後、1804 年 9 月、ロシアの船で南米、ホーン岬を經由し長崎に戻ったという話である。無事に戻った 4 人はその後、2 カ月にわたる幕府の取り調べを受けた。取り調べに当たったのは仙台藩一ノ関出身の蘭学者大槻玄沢であった。大槻は有名な「解体新書」の訳者、杉田玄沢、前野良沢の弟子である。聴き取り調査の結果は「環海異聞」16 巻にまとめられ、加藤、吉村の著作はこの「環海異聞」を底本にしている。私には吉村の著作の方が読みやすかった。以下、その概要である。

仙台藩の石巻は北上川の舟運を利用し、岩手南部の米の一大集散地として栄えた。河口の石巻で千石船に積み替え、一大消費地である江戸に運んでいた。その一つに**若宮丸**という船があった。1793 年 11 月 17 日、若宮丸は船頭以下 16 名、米 1332 俵、木材等に乗せ、江戸に向けて出帆した。出帆してから 1 週間後の 12 月 3 日、塩屋崎沖で暴風雨に遭った。舵が壊れ、転覆回避のため帆柱を切り倒した。あとは神頼みの漂流、幸い積み荷は米だったので食料は何とかなった。半年以上も漂流し 1794 年 5 月 10 日、アリューシャン列島の小島に漂着した。漂着後、船は波に砕かれ船頭の平兵衛が死亡し、代って**津太夫**が頭となった。島の住民は親切であった。12 日、島民と違う背の高い人物がやって来た。3 年交替で滞留しているロシアの毛皮商人であった。13 日、一行は船に乗せられて島の北東部の島（アツカ島）に移され歓待された。若宮丸一行 15 人は**アツカ島**で一冬過ごし、1795 年春の末、魚ばかり食べる所には身体よくない。我々は 2 年毎に本国に帰るので、そこまで連れて行くと言って革でつくった衣服を用意してくれた。その後、**ウナシカ島**、5 月 12 日、**アムチトカ島**に寄港し毛皮を大量に積み込んだ。この島は伊勢の大黒屋光太夫ら神昌丸の一行が漂着し、約 4 年半過ごした所で、やはり毛皮採集の基地であった。さらに船はカムチャッカ川の河口にある**ウスチ・カムチャツク**に着いた。ここに 2 日間滞在したのち、6 月 28 日、**オホーツク港**に着いた。（ウスチ・カムチャツク、オホーツク以外は手持ちの帝国書院発行の最新基本地図には記載がない）

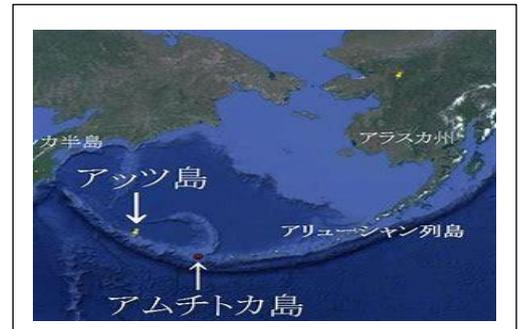




若宮丸模型



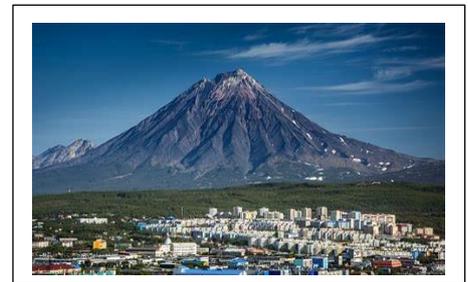
日和山から見た石巻港



アツカ島



アムチトカ島



ウスチ・カムチャッカ

若宮丸漂流民、津大夫ら一行がアレウト列島に滞在したのは1年ほどであったが、4年近く滞在した大黒屋光太夫ら一行に比べてその観察はかなり細かいが、島の人たちやロシア人の生活の否定的側面についてはほとんど触れられていない。自分たちが世話になった人達のことを悪く言うことは忍びなかったであろう。と加藤は述べている。アラスカとその属島（アレウト列島）が1867年3月、わずか720万ドルでアメリカ合衆国に売却されたのは、おとぎ話のような事実である。



オホーツクは、これまで見て来た地とは比較にならぬ大きな港町で、500石積ほどの船が数隻停泊していた。津太夫等15名は、政府から保護するように指令を受けていたので、宿舎が提供された。食事は牛乳、バターなど慣れぬものもあったが、いつの間にか好んで飲み、食べた。生活の必要からロシア語の単語を覚えた。彼らは連れ立って町を見て歩いた。2ヶ月近くたった8月18日、役人がやって来て、ヤクーツクに送られることを知った。当地の代官の任期が終わり、ヤクーツクに戻るにあたって漂流民を同行させるというもので、3班分かれて出発するというものであった。

先ず3人が出発することになり、籤を引いて**儀兵衛**、**善六**、**辰蔵**が出発することになった。「環海異聞」には儀兵衛等三人の旅の様子が書かれている。その旅は壮絶なものであった。馬の扱いに慣れたヤクート族の者が先導し、馬から馬に縄をつないで進む。寒気を防ぐため、一行は獣皮でつくった衣服、頭巾、手袋をはめて鹿の革の沓を履いた。雪は深く馬の下腹までとどくこともあった。9月26日、アウタンという地に着いた。大河の傍らに家が3軒あり、ここでヤクーツクまでの食料を調達した。オホーツクからこの地まで、50頭いた馬は18頭になっていた。代官の従者2名は凍傷になり、肉はただれて腐っていた。馬18頭では進むことが出来ず、ヤクート族の集落から20頭の馬と食料を調達した。所々にヤクート族の人家があり、夜はそこに泊まった。10月13日、ようやくヤクーツクの町についた。オホーツクから30日の旅程であったが、厳寒の季節であったので50日余を費やした。ここは戸数2,000ほどもある大きな町で、役所と寺は石造り、民家は丸太を組んだ木造の家であった。儀兵衛たち3人はその一軒を宿舎とし、家主は麦餅と牛肉与えてくれた。ヤクーツクに40日ほど逗留した後、儀兵衛ら3人の行き先は、先のイルクーツクとのことで11月24日、副代官に付き添われイルクーツクに向かった。冬季で雪が深く、役人と4頭または6頭の馬に引かれて橇に乗って進んだ。イルクーツクに着いたのは1796年正月24日であった。



ヤクーツク



イルクーツク 冬



イルクーツク 夏

早速、取り調べを受けたが、通訳は南部船の漂流民から日本語を教えられた者の由で、南部訛りが強く聴き取りに苦労した。三人は通訳の家に世話になることになった。この通訳は新蔵といい大黒屋光太夫の部下で4年前、光太夫が蝦夷の根室に帰還した際、日本語通訳として同行した功績により厚遇され、洗礼を受けこの地に残った者だと言った。その後、儀兵衛、善六、辰蔵3人は新蔵の家に世話になった。その頃、善六の心に変化が起き洗礼しイルクーツクに留まることになった。イルクーツクは戸数3,000ほどの町で、漂流民達が町をよく観察したことが書かれ、家の作り、寝室、厠、風呂には好奇の眼を向けている。飲食についてはパン、牛乳、野菜、コーヒー、酒、煙草等、その作り方、食事の仕方、ナイフ、フォーク、スプーンの使い方にまで及んでいる。そのほか、服装、寺院、出産、婚礼、祭礼、役所、武器、監獄、貨幣、距離の測定、楽器、医療、動植物、言語等が仔細に書き止められている。

イルクーツクに来て、7年が経過し、1802年3月初旬、町役所に呼ばれ、漂流民を連れて帝都に連れてくるようにという皇帝の命令書があったことを伝えられた。皇帝から漂流民のみ来るようにとのことであったが、新蔵も通訳として同行することになった。3月7日、都から来た役人達と馬車に分乗してイルクーツクを後にした。馬車は4頭立て、皇帝の御用であることを示す鈴がつけられ、宿場宿場では皇帝の威光を恐れられ渋滞することなく進んだ。道中多くは昼夜車を走らせ、食事のパンも車、用便以外は車を降りることはなく、途中の地名はほとんど分からなかった。あまりにもものスピードで左太夫と清蔵が途中で具合を悪くし残留した。トムスク（トンスケ）、エカテリンブルグを過ぎ、ペリマ（ペルミ）という美しい町に着いた。銀三郎が高熱を出し治療のため、ペルマに残ることになった。カザン（カザニ）を過ぎてモスクワに着いた。そこは旧都で、町の道はすべて敷石で、つらなる石づくりの家は華麗であった。4月26～27日、馬車の列はペテルブルグの町に着いた。イルクーツクから50日ほどの旅であったが、津大夫等と洗礼を受けた善六ら4人は、道中、口もきかず近寄ることもなく大きな溝が出来ていた。



トムスク（トンスケ）



エカリンブルグ



ペルマ（ペルミ）



カザン（カザニ）



モスクワ（赤の広場）

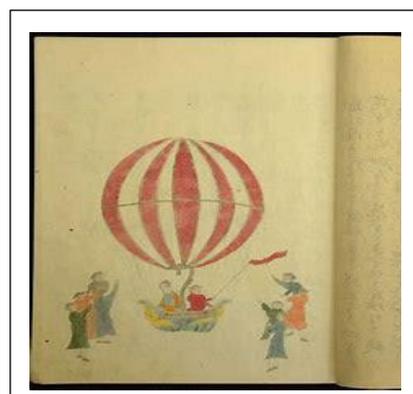
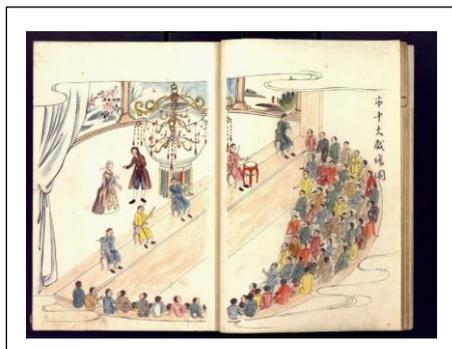


ペテルブルグ

到着後、侯爵の館で取り調べがあり、「日本に帰りたいか、それともこの国に残りたいか、いずれも各人の望みどお

りにしてやるというのが、皇帝の慈悲である」と述べた。津大夫、儀兵衛、左平、太十郎、茂次郎、巳之助の6人は日本へ帰して欲しいと述べた。侯爵の館での扱いは食事をはじめ特別なものであった。漂流以来、初めて米を口にし、麦酒、葡萄酒が食事の折に出された。館内には温室があり色々の花が咲いていた。馬車に乗って1500人乗りの軍艦を見たりした。侯爵の家臣が近日中に**皇帝(アレクサンドル一世)**が引見下さる旨の連絡が王室からあったことを伝えた。謁見のため腕の良い職人が羽織袴を仕立て、前頭を剃って鬘を結った。

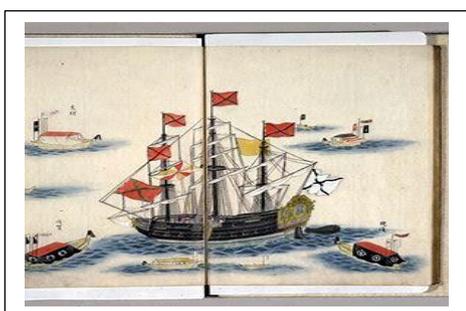
5月15日、津太夫らは侯爵の家臣に付き添われ宮殿に向かった。豪華で美しい謁見の間に通された。役人が陛下からこの国に留まるか、帰国したいのか、御下問があったときは正直に申し上げるようであった。皇帝をはじめ母后、皇后、弟君が出てこられた。津太夫たちは床に膝をついて平伏したが、付き添いの役人がこの国では拝謁するのは立って拝謁するのが礼儀、平伏してはいけないと注意した。皇帝は一人一人に帰国したいか、それとも留まりたいか、望みどおりにさせて上げると言った。**津太夫、儀兵衛、左平、太十郎の四人が帰国したいと申し上げた。**皇帝は「帰りたいと思うのは甚だもつものことである」と言って、一人一人の肩に手をおいた。ロシアにとどまりたいと言っていた善六たちには眼を向けるとはなかった。その後、侯爵は「今日は珍しい見世物がある。あなた方に見学させるように陛下からご命令がある」と言って見物した。その後、宝物殿で植物や剥製鳥、獣類、世界各国の衣服など見学、さらに宮殿内で芝居見物、市中大劇場でも芝居見物した。捨て子を養う施設も見学した。



劇場で芝居見物 気球に乗る
← 皇帝アレクサンドル一世夫妻

ロシアが津太夫等に好意的であったのは、12年前の1792年9月、ロシアは日本との交易を望みラックスマンという使節を派遣。その際、大黒屋光太夫等3人の漂流民を連れ心証をよくするためであった。結果は日本側が国書を受け取らず、交渉は長崎以外では一切応ずることが出来ないと言われ、重ねて来日した場合は長崎入港を許す信牌(長崎港入港許可書)を与えていた。ロシア政府は、交易要求の使節団を再び日本に派遣することを企てた。漂流民を温かく保護し連れ帰ることで幕府の心象をよくし、通商成立に結び付くと考えていた。

日本への使節団には露米会社の支配人であった**レザノフ**が任命された。6月12日、津太夫等4人、侯爵の家を出発し、ペテルブルグの外港、ロシア最大の軍港**クロンシュタット**に向かった。(日露戦争の折、日本に向けてロシアの大艦隊が出撃した港である)そこで、日本への使節船**ナジェジダ号**に乗船した。これまで通訳を勤めた新蔵は、妻子の待つイルクーツクに戻り、日本語教師を勤め文化7年(1810)52歳で亡くなった。



ナジェジダ号



レザノフ



クロンシュタット軍港 (バルチック艦隊基地)

6月16日、使節を乗せた「ナジェジダ号（使節団、津太夫ら漂流民、船長以下乗組員85人、僚船「ネワ号」（船長以下46名）を乗せてクロンシュタット港を出港した。意外なことにあの善吉が乗っていた。通訳として登用されていたのである。クロンシュタット港から、2400里の海路を経て、7月4日頃、デンマークのコペンハーゲン港についた。若い太十郎は好奇心が強く町を精力的に回った。7月27日、出航。途中、イギリスの臨検にあったが、イングランド南西端のファルマス港に入港。水、マキ、食物などを積み込んだ。船は南に進み、カナリア諸島のテネフリフェ島サンタ・クルス港に入った。島民は裸で短い股引を履いているだけだった。サンタ・クルス港を出て、北北東の風を受けて走った。暑熱が激しくなり、時折り雷雨にも見舞われた。そのうち、ロシアの船が初めて赤道を越えたと言って、賑やかなお祝いの会が催された。船は南アメリカに向かって航行しているようで、次第に耐え難いほどの暑さにより、毎日、水浴した。



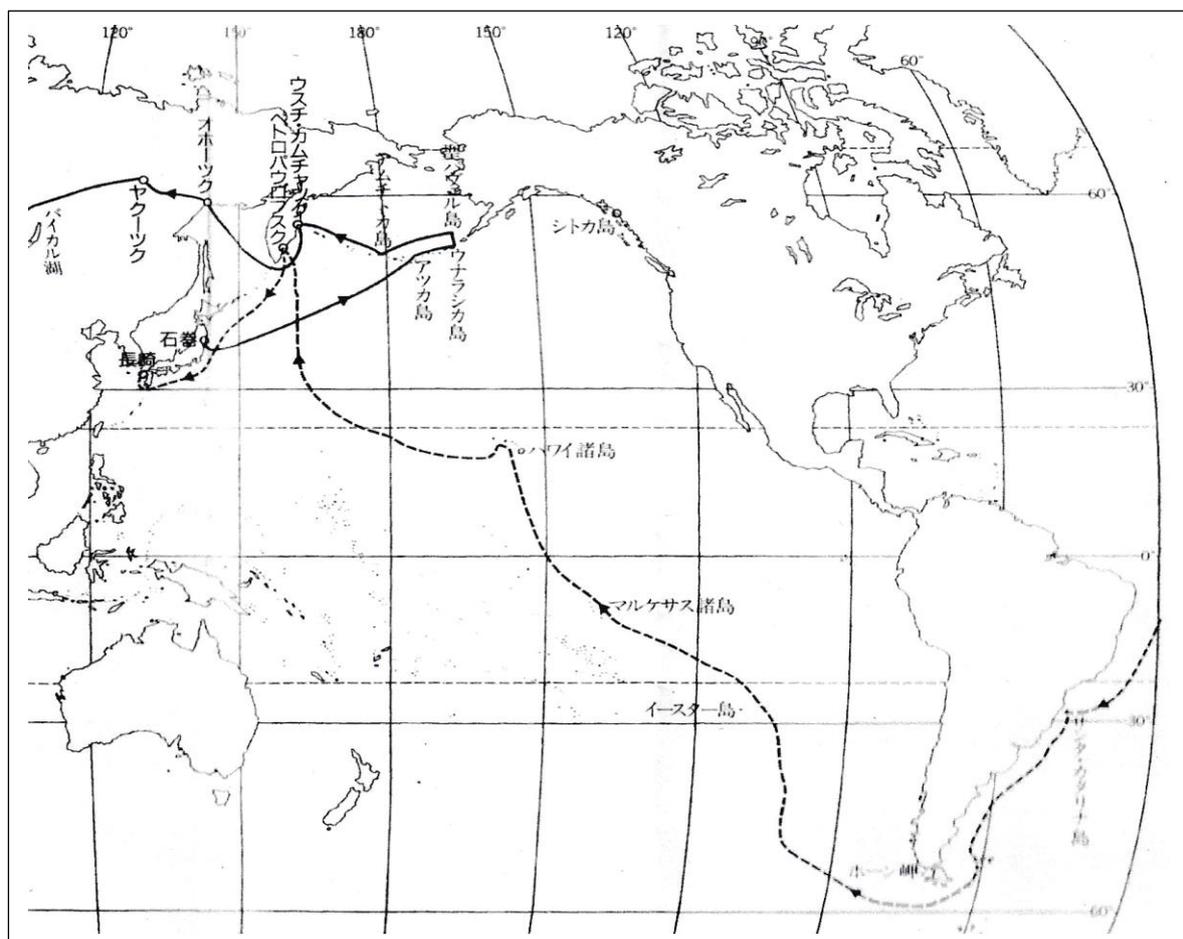
コペンハーゲン港



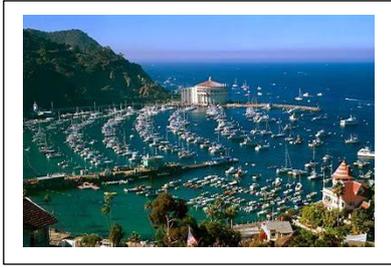
ファルマス港



テネフリフェ島 サンタ・クルス港



そのうち、10月16日、ブラジル東岸のポルトガルの所領であるサンタ・カタリナという大きな港に入港した。人々の肌は黒く男女とも素足で半裸であった。この地でも太十郎は上陸し見聞した。この湊に70日ほど停泊し、12月28日に出港した。



サンタ・カタリナ



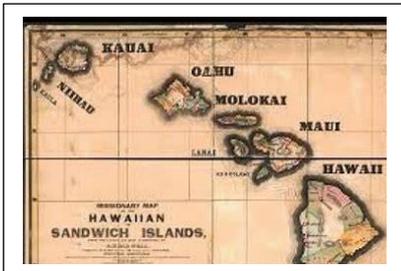
ホーン岬



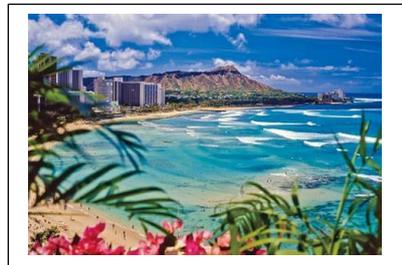
マルケス諸島

長い間の船旅。人間関係が刺々しいものになっていた。使節のレザノフは皇帝の命令を受けて日本に赴くという使命感からナジェンダ号、ネワ号の総司令官という意識から両船の行動について指示することが多かった。これに対し、両船長は、レザノフは使節であるものの、船上では一般客にすぎないとして、船の事に関して意見をすることに反発し、両者は言葉を交わすことはなかった。また、日本人漂流民の間も收拾しがたい険悪な空気が広がっていた。津大夫たちにとって、善六がナジェンダ号に乗っていたことである。レザノフは善六の通訳としての能力を認め寵愛し特別な待遇をし、かつ善六が津大夫たち4人を見下していたからであった。

さて、二隻の船は大西洋を南下し、南アメリカ大陸の最南端ホーン岬を廻って太平洋上に出た。4月中旬、両船はマルケサス諸島のある島に近づいて投錨した。島民たちは男女とも全裸に近かった。この後、再び赤道を越えた。行き先はサンドイッチ（ハワイ）諸島であった。20日ほど航海しハワイに着いたが、どの島でも食物が余りにも高価であった。ここで、ネワ号はナジェンダ号と別れた。ネワ号は露米会社の資材を、北アメリカのロシアの植民地カディヤク島へ運ぶ役目を負っていたのだ。



1778年、ハワイはサンドイッチ諸島と命名された。



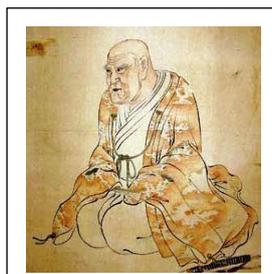
ペトロパウロスク

ナジェンダ号は北上し、カムチャッカのペトロパウロスクに到着した。港町には人家が27~28戸しかなかったが、岸には数門の大砲が据えられ火薬庫もあった。レザノフ使節団長は善六を長崎に連れて行きたかったが、船長は船の秩序を乱すとして、善六を下船させた。この処置は津大夫ら4人を大いに喜ばせた。

8月になるとペトロパウロフスクでは雪が降り港が凍結する。8月5日、ナジェンダ号は同港を出帆した。行き先は長崎、30日の航海の予定であったが、気象状況がよければ10日は短縮されるだろうとロシア士官は言った。



幕末の長崎湊



遠山金四郎（晩年）



大槻玄沢

1804年9月26日、ナジェンダ号は長崎に到着した。しかし長崎に着いても、長崎の役人では漂流民を引き取るかどうか決められないので、江戸幕府の意向を確認するため半年も待たされた後。文化2年（1805）正月19日、江戸から

目付**遠山金四郎**が長崎にやって来て「日本の国情からして、わが国、海外の諸国と通商せざることすでに久し」としてレザノフの通商要求は到底受け入れられぬと回答した。レザノフはやむを得ず了承した。交渉の末、漂流民だけは引き取ってもらえることになったが、奉行所でキリシタンでないかの厳しい取り調べを受けたのち、12月、江戸に移され、仙台藩上屋敷で2カ月にわたる取り調べを受けた。取り調べにあったのは陸中国（岩手県一ノ関）の**大槻玄沢**。かの有名な「解体新書」の訳者杉田玄白、前野良沢の弟子であった。玄沢の聴取は1806年2月まで及び、翌4年、「環海異聞」16巻としてまとめられた。これが加藤や吉村の著のタネ本となっている。

漂流民4名は13年ぶりに故郷に戻ってきたが、必ずしも幸せな生活を送ることはなかった。長崎で自殺未遂を図った大十郎は、心身とも衰えて、村に戻ってから一か月後に死亡、36歳だった。また長崎で病の床に伏した儀兵衛も体調が回復せず、その年の9月3日に45歳で病没した。津太夫は儀兵衛の死後8年、1814年7月70歳の高齢で死去。左平はそれから15年後の文政12年（1829）67歳で亡くなっている。

石巻市に「石巻若宮丸漂流民の会」というのがあり、2002年6月、吉村昭は大十郎の墓などを訪ねている。

「環海異聞」全12巻は国立公文書館に保存されその一部はネットで見ることができる。

画像はすべて無料画像を使用。訪れた町の当時の画像はなくすべて現在の無料画像を使用しています。以上